

新しいタイプの研究所

鈴木 増雄（東大理）

このシンポジウムは、基研の将来像を考える会であるが、他の講演者がすでにいろいろと議論しているので、私は、基研という枠から離れて、違った視点で、日頃こういう研究所がほしいと考えていることを述べて、基研の将来像を考える参考資料として活用して頂ければ幸いです。すでに、これから述べることのいくつかの項目は、基研でも実質的に実現されているか、されつつあるかもしれません。また、歴史的な理由で無理な面があるかもしれません。また、人事等の運用の仕方によって今後、ここに述べた事の一部は、将来実行できるかもしれません。また、ここにあげた条件も新しい研究所の運営の仕方によっては弊害となる可能もあることに注意しなければならない。要は運用次第である。

新しいタイプの研究所

— 中抜き研究所¹⁾ —

（基礎科学研究所、数理科学研究所…）

1. 構成年令：37才位以下¹⁾ 60才位以上²⁾。（この意味で中抜きである。）
2. 重点分野：基礎科学、数理科学。（例えば、数学、情報科学、物理、科学、宇宙科学、地球科学、…生物物理、脳の科学、認知科学、数理経済学、…）
3. 特徴：独創的な発想の出易い雰囲気の研究。優秀な若手と、功成り名遂げた大家との自由な交流（サロン風）。
4. 外来研究者制度：1. の年令以外の中堅の研究者も1年を限度として客員として滞在し、研究にのみ没頭できるようにする。（滞在費等保障される。）
5. 外国研究者の受け入れ制度：外国から長期、短期に受け入れ、全国の大学等で必要に応じて講演なども願います。
6. 派遣教授の制度³⁾：4. に関連して、当研究所のシニアのスタッフの中から、ここに留学する中堅研究者の所属大学等に、留学期間中、教育のため、好待遇で派遣する。
7. 文部省、学振等の科学行政への参画：シニアのスタッフの中で有能な人には、日本の科学行政への協力をお願いする。
8. 規模：37才位以下の若手研究者50人～100人。60才位以上のシニア研究者50人位。

9. 事務機構：秘書を含む事務職員及び技官（勿論60才以下）。
10. 設備：図書館の完備。スーパーコンピューターの設置。研究会、国際会議用の部屋、及び宿舎の完備。

参考文献

- 1) 鈴木増雄：若手研究者育成のため、この通称「中抜き研究所」（案）を数年前から関係者に説いてきた。
- 2) 久保亮五：「随筆—老人研究所」日本学術会議月報101（第23巻第8号）（昭和57年8月号）
- 3) 小口武彦、私信

討論

松田：予算面で恵まれてきたので、検討に値する。

鈴木増：トリエステ、サンタバーバラ、（プリンストン）高等研究所等を考えている。

長岡：年齢構成についてはその方向に行くと思う。基礎的研究をやっているときに必ずうまく行くとは限らない、そのとき37定年は問題になる。外国人の問題については今でも可能。

鈴木増：10年もあれば十分。同じ研究所にいないと長期研究ができないということはない。

長岡：それを評価する大学も必要。

藤川：若手が集まっても必ずしも良い研究が出来るとは限らない。若い人（中間層）がいるところほど若手が育つものであって、60を過ぎた人が多くいても若手は育たない。

鈴木増：ポイントが3つある。一つは精神年齢が問題で最先端の事も理解できるということ。もう一つは、利用者は年齢制限がないわけで、中堅のactiveな方が年中来てるような研究所であって欲しい、外国人は特にそうあってほしい。パーマネントにいる人は中がいない方が全国的視野でみたときいいのではないか。要するに新しい研究所を作ってそこに金を注いだら他の大学が煽りをくって人が行かないお金も来ない、一つの研究所だけで成果が上がればいいのかと言う問題がおこる。37を過ぎてからは自分の学識を発展させていろんな大学で研究と教育を発展させなければ日本の全体のレベルは上がって行かない。現在の大学にプラスするようなcomplementaryなタイプの研究所を作りたい。それから、若手教育というときに、大学院の時は大いにしごくけれど助手になったら自分で考えると言うのが本筋じゃないか。助手になった

ら大いに使う使われなければ仕事ができないと言うような人たちは新しいタイプの研究所には要らない、ほっといた方が伸びる人、非常にベーシックな事を考える人、そういう年齢層が27から37までである比率では重要ではないか。

湯川： どうして中の人が基研にいる必要があるのか、外国の方が魅力がある。

鈴木増： 外国に行く方がいいと言うのであれば成功していないことになる、そういう研究所にならなくてはならない、基研も考え直す必要がある。

土岐： アイデアを非常に強調して、非常に無理をしてると言う感じがある。歳を意識するのは発想的に問題がある。

「地方」研究者と基研

高塚 龍之（岩手大人文社会）

基研の将来についての考えは人や分野による以外に大大学・中央的大学の人と「地方」大学の人とではかなりの開きがあるように思われる。このシンポジウムで「地方」からの発言をすることになったのもこの趣旨からではないかと思う。一口に「地方」大学といってもDCのある大学、MCはある大学、学部迄、一般教育のみ担当、あるいは研究機関とは云えないようなところも含み、事情は様々である。従って私の話は個人的な見解にならざるを得ないが「地方」研究者に共通する面も多くあるはずである。

1. 格調の低い話

「地方」の研究機関（ここでは研究条件に恵まれない機関を総称する）に居る研究者は多かれ少なかれ「三無（人・金・時間）と三欠（自立性・継承性・総合性）」¹⁾ に象徴される問題に悩んでいる。とりわけ研究の activity を保つ上で情報・刺激・雰囲気欠如、研究交流の困難性（呼ぶ、出かける、共同研究）は深刻である。この状況は昔から続いており、今後「格差」は更に広がろうとさえみえる。しかし暗い話ばかりではない。一昔前に較べてコンピューター事情は格段に良くなったし、流行に追われず息の長い研究ができるという面もある。「地方」研究者の主体的努力も特筆しておきたい。MCやDCの設置、スタッフ・予算増への努力、地域での勉強会や研究会の企画、研究グループの育成、素粒子論グループ（SG）地方大学懇談会を通じての活動、等々、条件改善へのとりくみが続けられている。表1にこの1年、各地でもたれた企画をあげた。これからも「地方」研究者の主体的努力の一端